

夜鳥美鳥



YORIDORIMIDORI Vol.4

mikatuki98

31 <貧富の差と価値観>

何においても差が生じるのがこの世
何故なら玉石混交の世だから
つまり同時に全てが同次元に存在しているということ

川上と川下は同時に存在しないもの
川上には石がゴツゴツとした状態で転がっている
川下には川上から流れて来た玉がコロコロ並んでいる
川上で拾った石と川下で拾った玉を
同じ水たまりに放り込んだ世界
石は玉の存在を
玉は石の存在を
そこで初めて目の当たりにする

例えばトイレトーパー
ある家で透かしの桜模様のトイレトーパーに出逢った

いつも我が家は白の無地
私の好みで消臭剤代わりにもなる香料入り
デリケートなお尻の為にソフトを選びたい
希望的選択

友人の家では再生紙で出来ている物
芯が無く最後まで使い切るタイプ

子煩悩な人はキャラクターがプリントされていたり

値の張る物は富む者が選ぶ確立は高い
我が家の贅沢は上記が限度
と言うのは思い込み
単なる価値観の差に違いない

子供がいなくてもキャラクター好きはそれを選ぶかもしれない
ピンクの花がらは薔薇の香りのパーパー
当たり前のように使う他人

お尻が腫れる気分で使う他人
存在すら知らないままの他人

差から生じるあらゆる存在を知ることが可能な唯一の世界

他人の価値観を知ることが可能な唯一の世界

在ることを否定したり非難する事には意味は無いように感じる
知って何かを悟ればそれでいいような気がする

32 <空返事>

今日の風が強いのは台風9号の影響なのだろう
洗濯物が普段より乾き易いお天気具合なのは有り難い

風と言えば馬耳東風

いや、突然で無理やりな感もあるが

このところ私の周りには人の話などどこ吹く風な人物が多い
と言うよりもそんな状態な人達のことをヤケニ気になる

道路を隔てた斜め向かいの家の軒先に吊るされた風鈴が
24時間なりっぱなしで自宅にいる時は耳のイイ私にはストレスだが
風鈴自体は風に吹かれて心地良いのだろう
なにせ風が吹かなくては本領を発揮できないのだから

だけど人の耳に風が吹いて右から左

左から右への吹きぬけてしまうのは時に困る

大いに困る自体となるのが常

右の耳から入った風が言葉か意見か注意か指示か？

真ん中の口の辺りで確かに「はい！」と返事が聞こえるが

そのまま左の耳から言葉か意見か注意か指示は風となって

再び吹きぬけてしまうのだろうか.....

嗚呼、空返事がカラカラと風鈴の音もカラカラと

微妙にストレスをもたらしてくれる夏

33 <不言実行>

公言すれば実行せざるを得なくなる点

実行させるべき時は有効となる

有言不実行は実際は多い

うどん屋の釜の如く、湯だけ⇒ゆーだけ⇒言うだけとなる

口は災いの元のいくつかの種類のうちには

この有言不実行が招く災いも多い

しかし難しいと思われる不言実行の方が

実は気楽な時がある

理由も言わず、説明も付けず、行動に移すのみ

その行動に相手の気持ちが向いた時

何故？ どうして？ 何を意味する？

その理由なり説明なりを相手にすると効果的に違いない

先に理由なり説明なりをするのは机上の空論の如し

コレコレこう言う物を作りました

その工程とこんな感じで

その作品の仕上がりはこんな感じで

.....

はぁ～そうですか（モヤモヤモヤ）

というよりも

これが完成品です！

おお！コレですか。

してどのような工程で仕上げたのですか？

コレコレシカジカ.....

なるほどなるほど

いやぁ～素晴らしい！

なんてことになったりしてね

34 <この親にしてこの子あり>

昔からよく聞かれる言葉

この言葉では親と子の関係だが

子は親の背をみて育つ とか

親のする通り 言う通り とか

親の子に対する影響力の強さを物語っているのだろう

例えば会社の社長と社員 上司と部下

先生と教師 担任とクラスメート

立場的に下位の者が100のパワーで変革しよう試みるとも

上位の者の1のパワーで消滅してしまうのが常

常だと言って諦めると言っているのではない

下位の者が上位の者の心を動かすのは至難の業ということ

ある仕事場のあらゆる条件が同一としよう

その場所にほぼ同じ条件のスタッフを揃えたとしよう

唯一違うのは、その仕事場のトップに立つ人間のみ

そのトップの人間性がどれほど違いを生み出すかの

実験をしてみると良いだろう

トップの人間性はスタッフの気質のみならず

仕事に対する意欲、雰囲気、言動、素行、

仕事場におけるあらゆる物品の輝きや配置

そして扱い方

それから部屋の清・不潔感、空気感

何から何までことごとく

トップが影響を及ぼしていることが判明するだろう

そこまでして比較しないと

中に入ってしまった人間には

すっかり違和感が無くなってしまふからだ

当たり前という感覚の恐ろしさ

ものの道理、善悪の判断、正邪の区別、

全てが麻痺した状態となり

これが普通なのだと思い込んでしまふ

そしてそう思い込むことが楽だったりする

楽な状態から抜け出すのは苦痛に違いない

35 <中庸>

白と黒の間は灰色 とりあえず

白と黒が存在しているが故に 灰色は生じる

灰色とは何だろう？

すべてが灰色化してしまったら

この世は平和なのだろうか？

初めから灰色しかなかったら

灰色は白と黒の存在をしらないままなのかもしれない

区別を与えられていることは

ある意味有り難いことに違いない

全ては違うが 全ては同じなのだ

初めから中庸であることが尊い訳でもないだろう

天国と地獄のどちらの境涯も知ること

一度はそんな時代を経なくては

本当の意味の中庸を悟ることは至難のわざに違いない

混ざり気の無い白 純白

混ざり気の無い黒 純黒.....とは言わないな あえて言えば漆黒なのか？

いずれにしてもそれぞれがよりハイレベルなのだ

天使も大天使 悪魔も大悪魔

大きな仕事をなし得るのは 大がつくモノに違いない

大と大がぶつかり合った後の中庸的世界

その静けさは宇宙空間に一人ぼつねんと

漂っているような感覚なのかな.....

そんな風に想像出来ること事態が大ではないのだろう

想像を絶する程の中庸の世界を只管目指して

人は生きているのだと思えて来る

36 <挨拶>

挨拶と言うのはお尻を向けてするものではなく

顔を見て目を見てするものだと認識がある

こんにちは と言えば こんにちは と返って来る
それが普通と思う
ところが普通が普通でない人も居る

顔を見ても返事の無いのは
存在を無視しているということなのだろう
ところが無視されると激怒する
一体どういうこと？

挨拶が感情の起伏に左右されて出来ないのは
ある意味気の毒なこと
簡単が簡単でない人も居る

37 <嘘>

ほら吹きと言えば少年とオオカミの逸話を思い出す。
でも嘘ってそこらじゅうに転がってる。
嘘つきとほら吹きってチョット違うかな？

バレなきゃいいって発想は何処から来るんだろう？
うまく誤魔化せてると思ってるのかな？
ホラは嘘が見え見えな気もする。
でも嘘も結構見えて来るんだよね。

見えた時点で指摘することの意味があるか否か。

なにはともあれ「天知る地知る吾知る」
何かを誤魔化して、うまく嘘をつき通して、
知らぬが花を装っても、そういうこと。

全ては自分に帰って来ることが本当に分かれば
誤魔化すことに良心が咎める筈なんだけどな～

だから黙って見守るだけです！

38 <腐敗と沈殿>

じっと何かに耐えて我慢し続けることが美化されることがある。
確かに忍耐というものは、得難い徳となり、その人を成長させるものに違いない。
しかしどう耐えるかにもよる、と私は考える。

鬱憤という目に見えない物を貯め込む心の中。

心はゴムのように伸びていくだけでも感情を詰め込めるような錯覚をしがちだが
ゴムだから伸びすぎれば破れもするし、時間が経った古いゴムなら用をなさない。

辛うじて貯め込まれている何かも、時間と共に沈殿して

存在も忘れられたかのようなのだが、実は底の方で腐敗していたりする。

プンプンと突然臭っている悪臭。

その悪臭に耐えきれなくなって汚物を吐き出してしまいたくなる。

一度吐き出され始めた汚物はとどまるところを知らない。

吐いて吐いて吐きまくる。

そしてもうこれ以上吐きだすものが無くなった感覚を覚えたら、とりあえずはスッキリするだろう。

ただ、それは誰も居ない時間と空間で行われるべき儀式でもある。

39 <栗屁と芋屁>

屁の話をしようとしている私は、ある意味幸せであり平和に生きているのだろう。

そもそも秋の味覚の栗だの唐芋だのが手に入ることを当たり前と思っではいけない。

季節の物を口に出来る幸せを何とも思わないことの方が傲慢な人間の代表にでもなった気分だ。

自然とは自然とそこに存在するものではないのに、自然に生えるかの如き錯覚。

与えられている存在であり、ただ只管感謝の念を持ち続けるべき存在であり、

人間そのものが、その自然の一部であることを十分知るべきだと思う。

という訳で栗屁と芋屁だが(笑)、栗の姿と芋の姿を思い出して欲しい。

正に、その姿の如き屁の特徴を持って放出される事実を、日々感心するばかり。

その音を文字にするならば、栗屁はブコ・ブコ・ブコ・ブコ・ブッ・ブコ・ブー♪

片や、芋屁はブホー・ブホー・バホー・ボホーブォーン・ブブブー♪

とまあ、こんなイメージですかね(笑)。

40 <意識と潜在と無意識と顕在>

例えば、虫が好かぬと思っている相手に関する事々が、疎かになる。

表面的には単に忘れました、ということだが、潜在的に嫌だと思いう意識が

無意識のうちに忘れるという事実を引き起こす。

わざとではありませんから。

確かに表面的にはそうだろう。

しかしその潜在的に潜んでいる嫌悪感は負の方向へと無意識の内に導かれ顕在となる。

このようなことは多分、色んな場面で起っていることだろう。

それが頻繁に続くと、意識的にそうしているかのように相手には感じられるもので、

その潜んでいた感情は自ずと表出されてしまうものだ。

要は心根の問題だろう。

どういう気持ちで、その仕事をやっているか、その作業をこなしているか。
言動そのものに潜んでいる心根というものは、ある程度観察していると自ずと分かって来るものだ。
ただココで大事なことは、その相手の言動を見直し聞き直し載り直してあげる寛容さだろう。
慈愛をもって見守り続ければ、意識と潜在から薄れ、消えて行くに違いない。
そう信じるしか真の平和は来ないだろう。

mikatuki98